

図書館長賞

「 未知への可能性 」

経営学科 2年 阿部萌霞

「ほっ〜」と息をつく、いつものお気に入りの席。その場所からは遠くに生駒山が見え、メインストリートを見渡せ、行き交う学生たちの様子が見える。季節によっては桜や緑が綺麗だったり、夕暮れの柔らかな温かみのある光が入ってくる。どこか寛ぎさえ感じるのは、見える山は違うが、リビングから見ている景色に似ているからかもしれない。

図書館と言うと、堅苦しいイメージもあるかもしれないが、私にとってはオアシスのような所。友達や先輩と過ごす時間も楽しくて大切だが、ほっと一息つきたい時、ちょっと一人になりたい時、眠たい時（笑）また、空きコマや資格講座に行くまでの間、図書館で過ごして気持ちをリフレッシュできる。

昨年、私は「今日も私はここにいる。自分の可能性を信じて。」と執筆した。その時に、不思議と来年の今頃は、どんな自分になっているのかとても楽しみになった。まさに、GATEWAYの理念の一つである、「もう一人への自分への入口」に立ったような感覚になった。そして、このプチエッセイコンテストを通じて、知り合えた方々や、選書ツアーや座談会等の多くの機会を与えて頂き、沢山の貴重な経験をした。図書館は本だけではなく、多くの出会いや可能性がある場所だと思う。中でもレファレンスサービスは、学長がオープンキャンパスで「貴方はまだ自分を知らない、多くの可能性がある、やり方はいくらでも教えます、挑戦してください。」の言葉通り、漠然とした質問や相談でも真摯に相談にのってもらえ探している本が、あっという間に見つけ出してもらえた。たかが本、されど本、その一冊から何かが変わるかもしれない可能性の広がりを感じた。同じ6階の屋上テラスも、開放的な空間で、大きく伸びや深呼吸などがしたい時に利用している。

GATEWAYは開かれている、次なる扉を開けるのは自分自身だ。冒険のようでわくわくする。